



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# 八甲田山雪中行軍

## — 危機管理の意思決定 —

日露戦争を二年後に迎えることになる明治 35 年（1902 年）1 月 20 日の早朝、弘前第 31 連隊の 37 名に新聞記者 1 名を加えた計 38 名は、兵装して 10 日間で 224 キロメートルの雪の山道を歩くという行軍演習に出発した。

1895 年に日清戦争が終結した後も、ロシアは満州や遼東半島への進出を続けていた。当面、日本軍とロシア軍が衝突する可能性が高いのは満州と思われるが、将来的には日本列島が戦地になる可能性も考えられる。ロシア軍が日本列島に攻撃をかける場合には、艦隊で津軽海峡を封鎖して、青森県または他の東北地方の海岸に上陸する作戦が考えられる。青森県弘前市の陸軍第 8 師団、およびそれに属する弘前第 31 連隊や青森第 5 連隊の主な任務は、そのような脅威に対する本州北端の守りを固めることであった。

ロシア軍が上陸する際は、日本軍の拠点の近くに行くとは思えない。おそらく弘前や青森から離れた太平洋岸の八戸付近、または日本海側の鱒ヶ沢付近であろう。その際には、弘前と青森から敵の上陸地点に向けて、軍隊を移動して迎え撃つことになる。その時の経路は、普通に考えれば海岸線の鉄道および道路になるが、敵の艦隊が砲撃でそれらを破壊する可能性がある。優勢なロシア軍の戦力を考えれば、艦砲射撃を避けて、海岸ではなく山中を行軍しなければならない事態が十分に考えられる。青森から海岸線を通らずに太平洋岸に抜けるためには、八甲田山を越えなければならない。山越えでも夏の行軍ならまだ良い。しかし冬の行軍であれば、どれほど難しい事になるだろうか。しかもロシア軍は、

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールの大林厚臣助教授によってクラス討論のために作成された。ケースに記載された行軍の事実認定については、各種文献の間でも一致しない部分が多い。本ケースは、あくまで意思決定の演習のための資料であることを目的としており、記述した内容をもって事実認定を主張するものではない。行軍に関係した人物の名前には、仮名が用いられている。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒 223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉 4 丁目 1 番 1 号、電話 045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/> へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

Copyright© 大林厚臣（2004 年 4 月作成、2008 年 1 月、2010 年 4 月改訂）

世界の軍隊の常識とは逆に、伝統的に冬に攻勢をかける傾向がある。猟師でも入りたがらない冬の八甲田を縦走するのは無謀とされ、これまで冬期に軍隊がその山地を越えたことはない。そもそも、冬の八甲田を越えることは可能なのだろうか。もし敵の来襲によって、いきなり冬の八甲田山を越えなければならぬ事になったら、どれほど危険で無理な行軍になるだろうか。せめて事前に演習をしておけば、  
5 雪中行軍の課題を洗い出して、対策を工夫しておくことができる。戦地が満州になったとしても、格好の演習になるはずである。今回の雪中行軍はそのような意味を持っている。

明治維新から34年を経たとはいえ、日本は先進諸国と比べれば、文明、産業、軍事のいずれにおいても遅れをとっている。アヘン戦争以来の60年ほどの間に、アジアの多くの国が列強の植民地や  
10 属国になり、日本も対応を間違えると同じ運命をたどる危険がある。明治政府は、産業の振興と軍隊の強化に重点をおいているが、兵士の主力は農民からの徴兵である。1889年に徴兵令が改正され、それまで多かった徴兵逃れが難しくなり、徴兵制は皆兵制に近づくことになった。ただし学校制度ができて間もないので、兵士のなかには読み書きのできない者も多い。また、その後の昭和の軍国時代とちが  
15 い、軍隊は絶大な権力や影響力をもっていない。国民の軍隊に対する思いには、働き盛りの息子を徴兵される親としての、うらみの気持ちもある。

行軍を計画し指揮する第31連隊の広崎大尉(35歳)は、現在の群馬県に、利根川の廻船問屋の長男として生まれた。実家は裕福だったが、利根川の水運が蒸気船会社や鉄道などにとって代われ、幼少時に家業が廃業になった。幼い時から学問の才能を発揮していたが、家業が苦しくなってからは、  
20 平民の出身であることに対する差別もあって苦学することになる。学費が無料になる師範学校で、良き師を得て地理学にのめり込んだ。その後教職につくが、当時の学校教師の地位や給料に不満で、軍歴を志すにいたる。持ち前の頑張りで陸軍士官学校に入学し優秀な成績で終えた。日清戦争では戦場における地図作成に飛び抜けた能力を示して、戦後に参謀本部直属の陸地測量部に抜擢され、地誌調査のため全国に出張した。また、戦場で日本軍の寒地装備の不十分さに苦しんだ経験から、国内  
25 内外の軍事装備や軍事史の研究、とくにロシア陸軍の戦法の研究にも力を注いだ。当時の日本陸軍には、寒地の行軍や露営が兵士の健康にどのような影響を与えるか、装備の性能や運用がどのような影響を受けるかといった、寒地の作戦のための知識と対策が不足していた。そのため日清戦争では凍傷によって約4,000人の死者および重傷者を出していた。また、スキーや冬山登山の技術や知識は、日本にまだ紹介されていなかった。

## 弘前第 31 連隊

国の北方の守りを固めるため、1896 年に弘前に本部をおく第 8 師団が新設され、あわせて弘前に第 31 連隊が創設された。そのときに青森の第 5 連隊が、仙台に本部をおく第 2 師団の配下から離れて、新設の第 8 師団に編入された。青森の第 5 連隊は日本陸軍が創設された時以来の伝統ある連隊であり、東北各地の出身者が集まっている。中でも人口の多い宮城県と岩手県の出身者が多い。それに対して新設の弘前第 31 連隊は、ほとんどが地元の青森県出身者である。そして将校や士官には、弘前連隊を創設する時に青森連隊から転属してきた者が多い。こうした経緯から、青森連隊の者には本家意識があり、弘前連隊を分家と見なすような傾向がある。

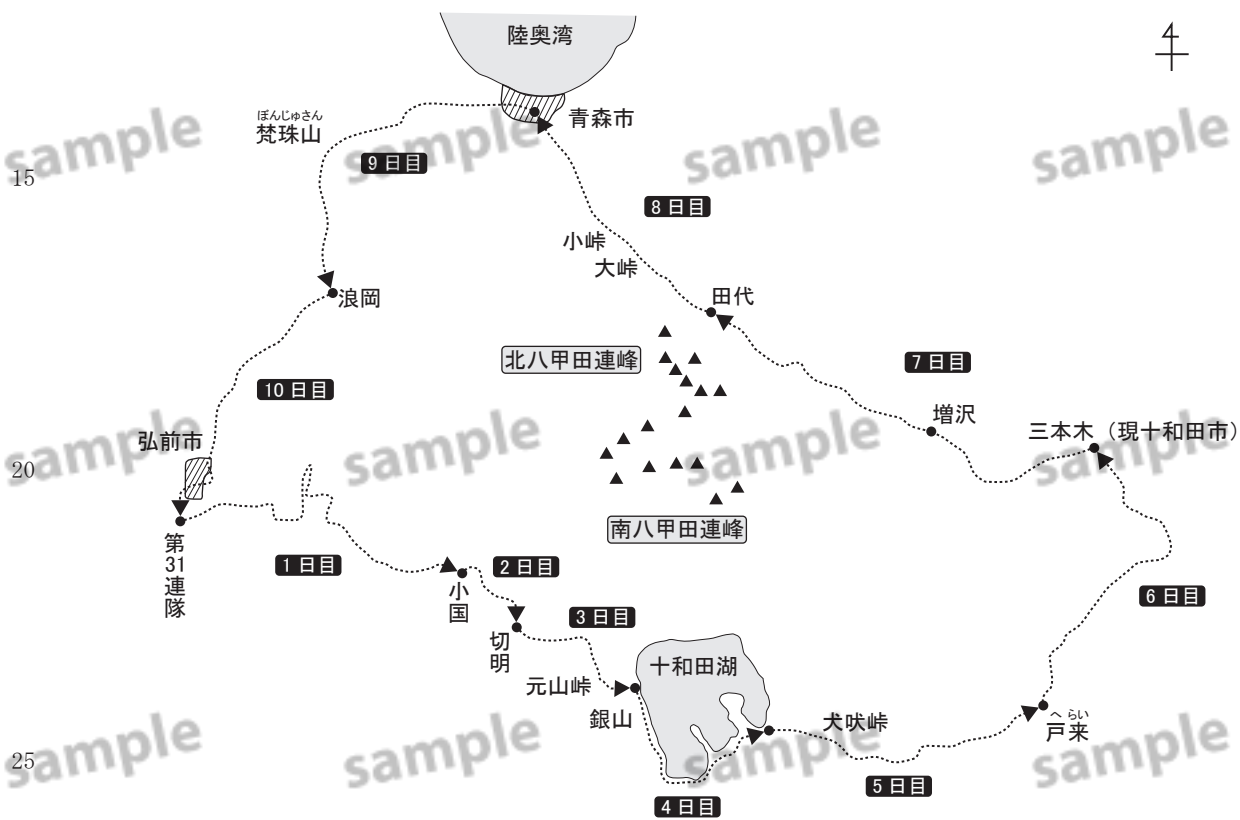
第 8 師団の師団長は、新設の弘前連隊に新進気鋭の士官を迎え入れるよう陸軍本部に打診し、1898 年 10 月に広崎大尉が弘前連隊に着任することになった。広崎大尉は第 1 大隊第 2 中隊長として着任すると、自分が率いる中隊の兵士の教育と訓練を徹底し、精力的に冬期作戦の演習を行った。1900 年 2 月には雪中露営（屋外で夜を明かすこと。雪中に壁や穴を作って風雪を防ぐことが多い。）の演習を行った。広崎の中隊は、最前線の歩哨から後衛まで実戦さながらに展開して露営し、風雪の激しい所とそうでない所、地形の凹凸によって寒気がどのように異なり、兵士の装備はどのようなものが必要かを調査した。調査報告は師団長から明治天皇に上奏され、「兵事雑誌」に掲載された。

1901 年 2 月には、弘前から岩木山を経て日本海の鱒ヶ沢に抜ける雪中行軍を行った。行軍は広崎を隊長にして 105 名で行った。行軍は二隊に分かれ、一隊は街道を、もう一隊は街道を外れて岩木山の山地を越えた。山地越えの部隊は午前 3 時に弘前を出発したが、吹雪に見舞われて目の前も見えないような状況で、鱒ヶ沢に着いたのは翌日の午前 6 時だった。途中の松沢村で村人の援助を受けたうえ、44km を歩くのに一睡もせず、休憩を除いて 22 時間かかった。気温は 0 度から -8 度で北風が強く、雪に腰まで埋まり、汗で濡れた下着が凍って、たとえようのない寒さだった。もともと、演習としては絶好の条件といえる。雪中の行動に関する貴重な経験と知識が得られた。

そのうえで今冬は、十和田湖越えや八甲田越えを含む、224km という空前の雪中行軍を行うのである。広崎大尉が計画した雪中行軍の行程は、図 1 のような周回経路である。まず弘前から十和田湖を経て太平洋側の平地に至り、その帰路に八甲田山を東から西に縦走する。1901 年の夏には、その経路にほぼ沿うかたちで、冬期行軍の下見を兼ねた夏期行軍の演習を行なった。

冬期行軍の演習は、青森の第5連隊でも行われていた。1890年には奥野大尉が、冬期に青森から八甲田山東麓を経て十和田湖まで、「大変な難儀のうちに踏破に成功した」（軍事報告でこのように記述されるのは、生命の危険を伴うほどと考えて良い）。1899年には加藤大尉が小川原湖が氷結した上を横断した。昨年（1901年）には、同連隊の第3大隊が八甲田山系を縦断する3日間51kmの行軍を計画していたが、事情があり取り止めになってしまった。そのため今年こそは、八甲田山を越える雪中行軍を行うべく準備をしていた。弘前連隊の意欲的な雪中行軍の予定表が、1902年1月6日に青森連隊に届いた。それを見て青森連隊は、まず1月18日に日帰り、八甲田山の高原台地に入る手前の小峠まで、往復20kmの行軍演習を行うことにした。その結果をもとに、今年の青森連隊の八甲田越えの日程と編成を決める予定であった。行軍は厳冬期を選んで、1月下旬から2月の初めになると想定された。

図1：弘前第31連隊の行軍予定路



八甲田山は、田茂菴岳（たもやちだけ）、赤倉岳、井戸岳、前岳、大岳、高田大岳、石倉岳、硫黄岳、の八つの峰からなる山系である。そのうち大岳の標高1584mが最も高く、前岳の1251mが最も低い。八つの峰はかたまって、その周囲に標高500～800mの高原状の台地を作っている。青森の市街から見れば、青森平野から高原台地の縁にかけて、なだらかに反り上がるような傾斜地が続いている様子を一望できる。傾斜地には針葉樹やマツが生えているが、高原台地の縁あたりが森林限界になり、台地より高い所にはあまり木が生えていない。

美しい形の山ほど、冬の素顔は恐ろしい。吹き付ける風は遮るものなく山肌に当たり、二方向、三方向から吹く風が、互いに衝突して渦巻き乱れる。冬の八甲田山には、日本海からの西風と陸奥湾からの北風が絶えず吹き付ける。強い風が吹くと、高原台地は人の身長より高く積もった雪が吹き上げられ、目の前さえも見えない雪地獄になる。そのような激しい地吹雪に捕まると、待っているものは凍死や雪に埋もれての窒息死である。地元の者は、天候が荒れる時期になると、山で狩をする猟師でさえ八甲田山に入ろうとしない。1889年2月には、12人の苦力が山中で露営中に全員凍死した。1898年にも遭難があり、地元の8人の若者が露営中に全員凍死している。

## 行軍準備

弘前連隊の行軍の編成は、広崎大尉のほか、中尉1名、少尉1名、現役見習士官6名、予備役見習士官2名、予備役見習医官2名、曹長1名、長期伍長18名、看護手1名、兵士2名、ラッパ手2名、そして地元の東奥日報の新聞記者1名の、計38名である。人数からすると小隊編成だが、構成はきわめて特殊である。兵士がごく少なく、長期伍長と見習士官がほとんどを占める。長期伍長とは、3年間の兵役義務を終えて、引き続き6年の奉職を志願した者である。長期伍長からは曹長に進級する者もいる。

行軍の参加者は原則として本人の希望によるものとして、連隊全体から募集し、広崎が人選を行った。曹長、長期伍長、兵士については、行軍路の少なくとも一部の道案内ができること、または雪山に精通していること、かつ身体壮健であることが条件だった。新聞記者も、21才の地元の壮健な若者である。士官（大尉、中尉、少尉）は曹長や長期伍長より上位の階級である。広崎大尉は、信頼できる部下の士官に加えて、冬期作戦の指揮者を養成するため、現役見習士官の全員と、予備役（現役を離れていて召集されれば兵役に就く者）見習士官を隊員に編入した。ただし予備役には面識がないので、連隊長の人選で選出した。そして出発前日に身体検査を行ない、結果に不安がもたれた現役と予備役の見習士官それぞれ1名を選考から外した。

実際の作戦で、敵を迎え撃つ行軍が30数名のような小隊編成であることは考えられない。少なくとも200人程度の中隊編成、あるいは1000人程度の大隊編成やそれ以上になるであろう。しかし今回の行軍は、あえて小隊編成で行うことにした。理由は、少数精鋭で危険な行軍を乗り切りたいこと。また小隊であれば、宿舎や食料の補給を民間の協力を頼ることができ、携行する荷物をかなり少なくできることである。中隊編成の人数になれば、食料、炊事用具、寝具などを、自分たちで運搬しなければならぬ。そのほか、行軍の道案内に地元の民間人を雇うことにした。地図を持っていても、積雪が多い

と目標物を把握できなくなるので、土地勘のある者が頼りになる。軍隊の行進を民間人が先導し、民家に宿泊するというのは、例外的なほど軍の外部に依存した計画である。一方で、行軍と調査の遂行には万全を期した。出発に先立ち、広崎大尉は隊員に対して、凍傷と感冒の予防をはじめ、危険や衛生に関する注意を繰り返して念を押した。それはこれまでの冬期演習で蓄積された知識で、たとえば次  
5 のような事である。

- 軍靴はすき間から水が入らないよう、堅牢で緩くないものを履く。
- 足をよく洗い、油脂を塗る。
- 靴下はできるだけ新品を用い、常に乾燥させる。毛製であればさらに良い。
- 10 ● 手足が冷えて感覚がなくなった時は、布でよく摩擦してから徐々に暖める。決して急速に暖めない。
- 川を渡るときは裸足で渡り、渡り終えてから水をよくふき取り、靴下をはく。濡れた足のまま靴をはかない。
- シャツが濡れた時は、脱いで予備のものに着替える。
- 水筒には一度煮沸させた湯を入れる。喉が渴いた時でも急に多量の水を飲まない。
- 15 ● 空腹のため疲労したときは、小隊長の許可を得て予備の餅を食べる。
- 寒さの厳しい時に雪中で睡眠すると凍死の恐れがあるので、小休止での睡眠を禁止する。
- 自衛のため、各自の薬物を持参して良い。
- 日光の雪反射を防ぐため、眼簾または眼鏡を使用する。
- 行軍中に凍傷や病気にかかったと思う者は、ただちに随行医官の診断を受ける。
- 20 ● 多量の雪を食べたり氷を咬んだりして、胃を冷やさない。
- 時計、方位磁石、予備の手袋、マッチを携行する。
- 休憩の際に直接雪の上に腰をおろすと、被服の保全や衛生に良くないので、60cm 四方の油紙を携行する。
- 難路を通過する時のために、径 5 ミリ以上で長さ 5 メートル以上の麻縄を携行する。
- 25 ● 暴風雨の時には、単独で 5 メートル以上隊列から離れない。
- 危険や困難に直面したときには、沈着のうえにも沈着に行動する。
- 行動中に疲労した者があれば、互いに助け合う。

そのほか医官に対しては、疾病予防や雪中での休憩の方法、食事、用便、入浴に至るまで、より  
30 細かい指示を与えている。服装は冬用の軍服の下に襦袢や股下を着用させ、手袋とコートを着用させた。さらに隊員には、藁ぐつ、予備の中着、靴下、手ぬぐいなどを用意させている。兵器は各自が歩兵銃と実弾 10 発を携帯した。行軍中の食料は、その日の昼食のほか、間食 1 回分を携帯する。食

料と寝具と案内人を、毎日の宿泊地で現地調達できるよう、前もって連絡しておいた。当時の山間部では、人を派遣するか郵便を送ることが唯一の通信手段であった（郵便も山間部は人が歩いて配達する）。今回の道中では、弘前を出発したあとは、三本木と青森を除いて電話や電報の施設はない。

さらに、行軍演習中に次の項目の調査を行うことにした。

- 戦術および補給に積雪が及ぼす利害
- 降雪時における地理的観察
- 天候と気温
- 各地の雪質
- 経路にある、山岳、河川、村落、坂道、谷沢、森林、牧場等の位置と名称
- 経路にある各集落の戸数、人口、物資
- 各集落の衣食住の状況および雪害の有無
- 雪中における方位識別
- 雪中における歩速および行軍隊列の長さ
- 雪中における行進と休憩の時間
- 積雪地における宿営法
- 雪中行軍における武器、装具、食料、被服
- 積雪地における夜間行軍
- 雪中患者救済術
- 雪中における軍隊衛生

このほか、まだ地図が整備されていない時代だったので、地図を作製するための調査も行う予定である。新聞記者を除くすべての行軍参加者に、これらの調査項目を分担して担当させた。また事前に行軍経路の道路、積雪の状況、案内人の有無について調査するため、参加する士官と見習士官を各町村に派遣した。見習士官以上の階級の参加者は、正月休み返上でこれらの準備にあたった。

## 行軍始まる

### 1日目（1月20日）

行程は、弘前の連隊駐屯地から竹館村小国までの26kmである。地元詳しい案内人1人に先導させて、雪の降る中を、夜明け前の午前5時20分に出発した。午前6時の気温は-3度であった。1日目の道中は、あえて最短距離ではなく暗い中を何度も迂回して、行軍が研究も目的にしていることを隊員に実感させた。途中で積雪2.2mの黒倉山を越える時には手間どった。急な登り坂では、足場の良い所に先に登った者が、後続の者を引っぱり上げるようにして進んだ。午後3時20分に到着した小国は、戸数24戸、人口120人の山間の小部落である。隊員は民家に分宿した。小国に到着すると広崎は、これから毎日、隊員は宿泊地に到着後3時間以内に担当の調査研究の報告をするよう指示した。

### 2日目（1月21日）

行程は、小国から同じ竹館村の切明までの6km。午前8時に出発して、午前11時40分に到着した。わずかな距離だが、かなりの時間がかかっている。積雪は平均2.5m、最大3mであった。途中の琵琶の平（びわのたい）という平原は、積雪が軟らかく、歩くと言うより雪の中を立ち泳ぎで進むようであった。1899年には琵琶の平で、吹雪で道を見失った小国の村人5人のうち2人が凍死するという事故が起きている。気温は午前6時に-3度、正午に-1度であった。一列縦隊の隊列の長さは、行軍の難しさを反映して、1日目の平地では43mだったものが、この日は60～80mに伸びた。切明は戸数10戸の小部落だが、温泉があった。

この日の研究対策会で、軍靴で雪の中を歩くことの困難さが指摘された。雪中行進の研究を担当する見習士官の意見もあって、翌日からは携行している藁ぐつを履くことにした。凍傷の予防のため、軍足を重ねて履き、唐辛子をまぶして、油紙で包んだうえで藁ぐつを履く。また、携行食の握り飯や焼き餅は、凍るのを防ぐため、油紙にくるんで上着の内側の腹部に巻き付けることにした。水筒の水は七分目にしてブランデーを少量加え、行軍中は水筒をゆすって水が凍らないよう注意する。小休止では、立ったままではなく足踏みをして、体が冷えるのを防ぐことにした。

### 3日目（1月22日）

行程は、切明から十和田湖西岸の十和田村銀山までの16km。途中で難所の岩嶽森（現在の岩が岳）という山を越えるので、地元の案内人5人を雇い、午前6時30分に出発した。気温は午前6時で-3度、正午で-2度、岩嶽森の頂上では-7度であった。一日中雪が降っていた。積雪は5m前後で、岩嶽森の頂上では8mになった。歩くと、表面の固まった積雪が顎に当たるまで体が沈む。岩嶽森を過ぎてからも、急な坂を4回登り、4回下った。登りはときに500m以上標高を上げ、下りは毎



回 200 m以上標高を下げた。隊列の長さは、登りで 90 m、下りで 130 mであった。途中で隊列の前方で雪崩が起きたが、その雪の堆積を乗り越えて進んだ。この日は、用意してきた麻縄を初めて使い、全員の腰を結び合って行軍した。午後 2 時 55 分に到着した銀山は、戸数 40 戸の鉾山町で、旅館も 2 軒あった。

#### 4 日目 (1 月 23 日)

銀山から十和田湖東南岸の法奥沢村宇樽部までの 18km。午前 7 時に出発した。道中は湖岸だが、十和田湖は火口にできた湖なので、断崖絶壁続きの危険な道である。地形だけに限れば、全行程の中でこの日がいちばん険しいものになる。夏でも藤かずらをよじ登るような難路だったが、冬は倒木や崖が雪で覆い隠されて、一歩誤れば湖に転落する危険があった。そこで、踏破が難しければ途中でいつでも船を利用できるように、船を並行させて進んだ。十和田湖は冬期でも風が強いので、波が立って湖面は凍結しない。北西の風が強く、どんよりした曇り空で、午後から雪になった。気温は午前 6 時に -8 度、正午に -3 度、午後に入るとぐんぐん下がって、行軍中に -10 度になった。積雪は場所により 2.3 ~ 3.7 m であった。隊列の長さは、登りで 100 m、下りで 120 mになった。また平均歩数は、登りが毎分 40 歩で、下りが 48 歩とこれまでで最低になった。平均歩幅は、登りが 25cm で下りが 50cm と極端に狭かった。ただし結局船は使わずにすみ、午後 4 時 27 分に無事到着した。宇樽部は戸数 24 戸の小集落だが、最近入植した開墾小屋ばかりであった。村人は歓待に尽くしてくれたが、余裕の夜具はおろか家具もほとんどない。隊員たちは分宿して土間にむしろを敷き、むしろを掛けて寝たが、あまりの寒さに十分な睡眠が取れなかった。夜は暴風雪が吹き荒れ、すさまじい天気であった。

#### 5 日目 (1 月 24 日)

宇樽部から戸来 (へらい) 村金ヶ沢までの 24km。途中で標高 900 m の犬吠峠を越える。昨夜からの吹雪が続き、午前 6 時の気温は -10 度であった。地元の男性 2 人と女性 1 人の案内人とともに午前 6 時に出発した。犬吠峠までの 10km は道らしきものは何も無く、胸まで雪に埋もれ、顔に風雪が吹き付けた。今日も麻縄で全員を結ぶ。耐えられないほど強い風が吹けば、しばらく雪の上に体をあびせてやり過ごした。午前 10 時に犬吠峠を越える時には、気温は -16 度になった。寒さで体は震え、心臓は激しく打ち、眼がくらんだ。積雪は 5 m 近かった。峠をおりた正午でも、気温は -7 度であった。携行食も水筒の水も凍結してしまい、仕方なく雪をかんで喉を潤した。午後にも起伏のある道を進んだ。吹雪は一層猛々しくなり、気温は下がった。午後でも隊列の長さは、登りが 100 m で下りが 110 m。平均歩数は登りが毎分 40 歩で、下りが 45 歩。平均歩幅は登りが 25cm で下りが 50cm であった。午後 6 時 54 分に到着した金ヶ沢は、戸数 59 戸、人口 350 人で、村役場や雑貨店もある集落である。

## 6 日目 (1 月 25 日)

金ヶ沢から三本木村(現在の十和田市)までの 28km。気温は午前 6 時に -4 度、正午で -2 度であった。雪は止み、風もそれほど強くなかった。行程は平坦で、これまでとは見違えるほど容易な道中であった。午前 7 時 30 分に出発して、午後 4 時 11 分に到着した。伍長の 1 人が、3 日前に岩嶽森に向かう断崖で左膝を痛めていたが、この日の途中についに関節が腫れ上がり歩けなくなってしまった。患者の搬送はかなり困難で、歩けない患者を他の者が運ぶようになってからは、行軍の速度は半分以下になった。この伍長は三本木の最寄りの駅から列車で弘前に帰すことにした。三本木は戸数 870 戸、人口 5300 人の大集落である。村役場や旅館もあり、三本木警察分署からは電報で各地と通信することが可能であった。広崎大尉は自分の上司である弘前連隊の秋田少佐あてに、三本木に無事到着したことを、伍長が 1 人先に帰営することを打電した。

広崎大尉が旅館に戻ると、旅館の主人が他の人に分からないように、半紙に書き留めたメモを渡してくれた。メモは、弘前連隊の秋田少佐が事前にかけてきた電話の内容を書き取ったもので、青森第 5 連隊の雪中行軍が、中隊編成で 1 月 23 日午前 6 時に青森を出発したこと、行軍中隊の指揮官は青盛大尉であり、編成外として能代少佐ほか大隊本部 8 名が随行すること、田代、増沢を経て 25 日に三本木に到着の予定であることが書かれていた。中隊編成であれば人数は 200 人程度になり、食料、炊事用具、寝具などを運搬することになる。1 月の積雪では馬が使えないので、人力でそれらを運ぶ必要がある。第 5 連隊の青盛大尉は、秋田県の漁村の出身で、昇級して着任間もないものの、実直で勤勉な人物である。能代少佐は青盛大尉が所属する大隊の大隊長であり、第 5 連隊の教育委員主座を兼ねていた。大変な自信家であり、昨冬中止になった八甲田越えの行軍の指揮を予定されていたので、今年こそは行軍を成功させたいと意気込んでいた。夜になっても第 5 連隊の行軍中隊は到着しなかったが、余計なことを言って隊員を不安にさせてはいけないし、軍の行動に関する情報はあまり周囲に推察されない方がよい。第 5 連隊のことは隊員には黙っていた。

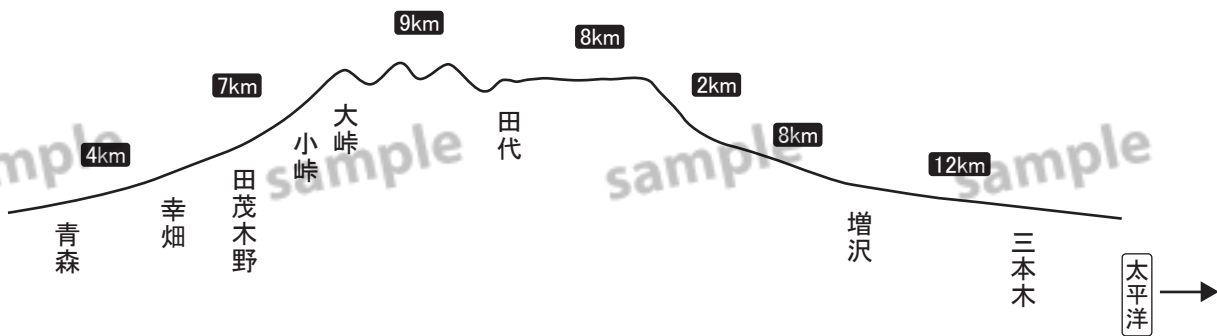
## 7 日目 (1 月 26 日)

三本木から田代までの 30km。気温は午前 6 時に -5 度、正午で零度であった。午前 8 時に出発して、熊の沢川に沿った雪道を 12km 進んで、午後 2 時に大深内村増沢という集落に着いた。ここから先は田代まで人家はない。増沢は戸数 5 戸、人口 35 人で、暈のある家は一軒もないような集落だが、全戸を挙げて厚遇してくれた。ここで食事をとって、田代に向かう予定であった。いよいよ八甲田山に入るのである。しかし村長は、午後になってから田代に向かうのは無謀だと言う。冬期では増沢を朝に出ても、田代に着くのがやっつとであり、午後からでは途中で夜道になってしまう。悪いことは言わないので、ここに泊まって明日早く出発するようにと強く勧められた。軍隊では予定を延期することは望ましくないが、言い方に誠意が感じられるので、意見に従って増沢に泊まることにした。ただし 37 人を泊めるだけの場

所も寝具もない。集落の馬 7 頭と牛 6 頭をすべて畜舎から追い出して、そこにむしろを敷いて寝床を作った。天気はまた崩れ始めてきた。

村長に確認すると、この日まで第 5 連隊は増沢に現われていない。村長は、ここ数日の大雪のため、青森に引き返したか、田代に留まっているのだらうと言う。しかし考えてみれば、三本木やこの増沢に、第 5 連隊の安否を問う連絡が青森の連隊本部から入っていないのは不思議である。もう一つ不思議な事といえば、2 日前に犬吠峠を越えたときに、隊員たちの方位磁石の針が動かなくなり使用不能になった。今はいつの間にか使えるように直っている。2 日前は案内人がいたので事なきを得たが、なぜ磁石が使えなくなったのかは不明である。

図 2 : 八甲田越え地形断面図



### 残りの行軍予定路

増沢に泊まることで、残りの田代までの行程は 18km になる。熊の沢川沿いに 8km 進んだ後で、急坂を 2km ほど登り、そこからいよいよ雪深い八甲田山の高原台地に入る。積雪で道が見えなくなった高原台地を 8km 進むと田代に到着する。田代は、高原台地の広漠とした雪原の中の窪地にある標高 520 m の温泉場で、4、5 軒の建物がある。冬期は雪に閉ざされて来る者もないが、小山内という一家が山籠もりをして温泉場を守っているほか、炭焼きが 15 人ほど籠もっている。申隊編成で兵士が来たとしても、十分な泊まる部屋と食料の備蓄がある。田代までは、大深内村に頼んでいた 7 人の案内人を雇う予定である。7 人のうち 1 人は八甲田山の地理に詳しい猟師であり、他の者は主として、2 人ずつ交代で猟師に先立って雪かきをするのが仕事になるだらう。

田代から青森までは 20km。田代でその先の案内人を雇う予定である。田代から高原台地を 9km 進んで大峠に至るまでは、さらに難関の地域である。尾根と沢の起伏が続き、沢は積雪が深く、崖や凍結した滝が雪に覆われて隠れていたりする。そのような崖を落ちると、登って戻ることは不可能である。

大峠で高原台地は終わり、そこから青森へは単調で安全な下り坂である。大峠から小峠、田茂木野（たもぎの）の集落を経て、幸畑の集落までの 7km はほぼ 20 分の 1 の下り勾配で、幸畑から青森までの 4km はほぼ 100 分の 1 の下り勾配である。田茂木野は戸数 20 戸、人口 120 人の集落であり、幸畑は田茂木野よりも大きい集落である。

5

青森から後は、梵珠山を越えて浪岡に至り、弘前に帰ることになる。青森から弘前の間は、あえて梵珠山を越えずに平地を通れば国道と鉄道があり、他の区間に比べれば危険は少ない。

10

### 参考文献

新田次郎	「八甲田山死の彷徨」	新潮文庫	1978 年
高木 勉	「八甲田山から還ってきた男」	文芸春秋	1986 年
川口泰英	「雪の八甲田で何が起こったのか」	北方新社	2001 年
15 保阪正康	「あの戦争は何だったのか」	新潮社	2005 年

(注) 新田次郎の小説は史実にかなり忠実だが、実際には、小説にあるように 2 つの行軍隊を競争させてはいないようである。

20

25

30

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

---

不 許 複 製

---

慶應義塾大学ビジネス・スクール

---